

ゼカリヤ書 12章 8-10節、13章 1節

ガラテヤの信徒への手紙第3章 23~29節

ルカによる福音書第9章 18~24節

先週の月曜日から祭色が緑に変わりました。これから11月末までしばらくの間、緑の期節が続きます。この緑の期節は、使徒書と福音書を連続して学ぶという特徴がありますが、旧約日課に関しては、それぞれに合わせた箇所が選択されています。本日の旧約日課は、「ゼカリヤ書」です。この箇所が選ばれているのは、本日の福音書にある「**神からのメシアです**」（ルカ9:20）にある「メシア」について、旧約におけるそのメシア像と、イエス様が示されたメシア像とを比較するためだと思います。

旧約日課の「ゼカリヤ書」は、一二小預言書と分類される文書の一つです。預言書に含まれるのですが、8つの幻などの記述があり、黙示文学的な要素があります。成立したのは、バビロン捕囚以後で、神殿を再建する時と考えられます。実際、「エズラ書」、「ネヘミヤ書」には、預言者ゼカリヤの名前があります。しかし、黙示文学的な内容があることから、より後期に書かれた文書であるとも推測されます。いずれにしても、イスラエルの再建を、ユダ族を中心として述べています。またそのことが、場所としてエルサレムを中心に行われると告げています。それらの事柄は本日の箇所、「**その日、主はエルサレムの住民のために盾となられる。その日、彼らの中で最も弱い者もダビデのようになり、ダビデの家は彼らにとって神のように、彼らに先立つ主の御使いのようになる**」（ゼカリヤ12:8）という言葉からもわかります。

さて、この箇所もそうですが、本日の旧約日課には「その日」という表現が何度も出てきます。この言葉は直訳しても、「この日」という単純な表現です。しかし、これは主なる神様が決定的な何かを行う日、狭い意味では主なる神様の裁きの日を意味します。それゆえに、そのあとに「**その日、わたしはエルサレムに攻めて来るあらゆる国を必ず滅ぼす**」と続きますが、この表現は少し注意が必要です。イスラエル中心主義、あるいは排他的なイスラエル擁護と思えてしまうからです。しかし、ここで述べられている事柄は、歴史上のいつでもどんなことがあっても、主なる神様がイスラエルを守るという意味ではありません。主なる神様が定めた時に、エルサレムを中心にしてイスラエルを守ることを通して、主なる神様が真の神であることを、諸国の民が知るという意味です。そもそもイスラエルが、アッシリアとバビロンに滅ぼされたことも、主なる神様の正義が諸国民に示されるためでした。主なる神様は、不正や悪がはびこることを、許さないからです。

これらのことを考えますと、「ゼカリヤ書」が語ろうとしている事柄は、単純です。主なる神様こそが神様であり、正義と公正を望まれる方であるということです。それは、『聖書（旧約）』全体が示している事柄です。この単純な事柄の具体化・実行を一言で表現すれば、主なる神様に立ち返ることです。しかし、それは単純であると同時に、具体化・実行が難しい事柄です・イスラエルの民は、預言者を通して何度もそのことを呼びかけられても、聞き入れなかったのです。預言書である「ゼカリヤ書」が、黙示的な内容を用いて呼びかけているのは、それまでの預言書のような理論や概念を超えて、イメージで主なる神様に立ち返るように、促そうとしているからかもしれません。

これらのことから、主なる神様こそが神様であること、そして正義と公正を求める方であること、そのことをしっかりと心に刻んで生きること、それがイスラエルの信仰、あるいは『聖書』の信仰とも呼ぶことができると思います。

先週の主日に三位一体という事柄について触れましたが、わたしたちの信仰の対象は、三位一体の神様ですから、この『聖書』の信仰は、イエス様を通して主なる神様を信じたとしても同じです。イエス様を信じるが、主なる神など知らないということはありません。その意味では、信仰の対象は、ユダヤ教徒もキリスト教徒も同じです。しかし、ユダヤ教とキリスト教の信仰の在り方は、全く同じなわけではありません。そのことについて触れているのが、本日の使徒書「ガラテヤの信徒への手紙」です。

本日の使徒書「ガラテヤの信徒への手紙」の3章24節に「**こうして律法は、わたしたちをキリストのもとへ導く養育係となったのです。わたしたちが信仰によって義とされるためです。**」という文言があります。ここから有名な「信仰義認」という神学が引き出されます。「律法（行為）義認」ではなく「信仰義認」、これはプロテスタント教会にとっては、不可欠な信条のひとつです。この信条を持つという点では、その重要度は異なりますが、わたしたちの聖公会も同じです。しかし、パウロ自身が、律法か信仰かと二者択一的に考えていたのかというところではないと思います。本日の使徒書の少し前の3章21節で「**それでは、律法は神の約束に反するものなのでしょうか。決してそうではない**」と述べています。また、本日の箇所でも「養育係」と表現し、律法の存在を認めているからです。そもそも「信仰」という言葉は、ギリシア語であっても、ヘブライ語であっても「行為」の反対語となるような心の事柄・心情的な内容を意味するわけではありません。誰か・何かに忠実であること、全身を傾けることを意味しています。日本語では、宗教におけるそのような行為を信仰と表現してしまうのですが、パウロがここで「信仰によって義とされる」と述べているのは、一人ひとりがイエス様に対する忠誠心に基づいた、それぞれの行為によって義とされるということの意味しています。

そもそも律法とは、イスラエルの人びとを無条件に最初に愛された神様が、その愛への応答の仕方として与えた法律です。その意味では、律法は現在も廃棄されたわけではなく、有効です。また律法は神が定めたものである限り、不完全ではありません。しかし、法律は、現実の現象に適応させようとする場合、必ず不完全な人間の理性と行動が必要となり、その時、誤りが発生してしまう可能性があるのです。そのことを、パウロは、「**こうして律法は、わたしたちをキリストのもとへ導く養育係となったのです**」（ガラテヤ3：24）と述べて説明しているのです。養育係は、悪い存在でも間違った存在でもありません。それが必要な人たちには、今も必要です。「**しかし、信仰が現れたので、もはや、わたしたちはこのような養育係の下にはいません**」（ガラテヤ3：25）と述べている通り、それが不必要になったのです。イエス様のご生涯と十字架と復活という模範が示されたからです。

律法を徹底して実行しようとしていたパウロは、かつて教会を迫害しました。うわさに聞いたイエス様の存在と教会の存在が、律法に違反すると思ったからでしょう。しかし、復活のイエス様に出会ったとき、主なる神様の愛に触れ、そのイエス様を通して主なる神様に忠誠を尽くすことに、律法を越える素晴らしさを見出しました。そして、今まで自分にとって不可欠であり、すべての中心であった律法が、もはや自分には必要のない養育係であったことに気付いたのでした。

「義とされる」とは、法律など何らかの判断基準によって、正しいとされることを意味します。パウロはその表現を用いて、人は律法を守ることを通して、主なる神様に対して、自分が正しいと認められるように目指してもよいが、それは主にイスラエルに限られた方法であり、実行不可能ではないが困難であると示しています。しかし、イエス様を通して主なる神様に忠実さを示すことによって、主なる神様に正しいと認められる事柄は、より実行可能であり、すべての人に開かれている。ちょうど、「ゼカリヤ書」が主なる神様が神であることを諸国民に示そうとしたことと同じように、すべての人に対して、主なる神様に立ち返る道が開かれるからです。

これらのことから、イエス様を通じた忠実さが課題となったとき、旧約的な意味で、選ばれた民であったこと、民族的な違い、あるいはこの世界の様々な区分、それら人間的な事柄は、優先的な事柄ではなくなりました。だからこそ、パウロは、「**そこではもはや、ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由な身分の者もなく、男も女もありません。あなたがたは皆、キリスト・イエスにおいて一つだからです**」（ガラテヤ3：28）と語るのです。パウロが使徒となったことは、イエス様の最初の弟子であったことも、優先的な意味を持たないと示していると思います。

イエス様を通して、すべての民に主なる神様を信じる道が開けました。しかし、そのイエス様も、最初からどのような方であったかが、自明だったわけではありません。聖書日課の福音書の物語では、人びとがイエス様を誰だ

と知っているかが問題になっています。イエス様は、「**群衆は、わたしのことを何者だと言っているか**」(ルカ 9:18)と、弟子たちに尋ねるのですが、答えは「洗礼者ヨハネ」、「エリヤ」、「誰か昔の預言者」でした。人びとは、それぞれの理性的判断から、イエス様をそのように考えていたのです。それらは教科書的な答えというよりも、「そうであってほしい」という願望の投影であり、答えとしてはすべて間違いです。弟子たちは「神からのメシア」と答えます。文脈上あえて「メシア」と訳されていますが、「キリスト」と訳しても構いません。イエス様はキリストですから、言語上は正しい答えなのですが、それも間違いでした。イエス様が示そうとされる「メシア」と弟子たちの求める「メシア」は内容的に異なるからです。だからこそ、イエス様は、21節から24節で「メシアの受難」を予告します。しかし、弟子たちは、そのことを深く理解しないまま従いつつ、十字架を前にしてイエス様に対する忠実さを捨てて逃げ出してしまうのです。

弟子たちは、復活したイエス様に出会い、もう一度忠実さを取り戻します。律法に集中し、教会を迫害していたパウロも同じです。復活のイエス様に出会い、何に対して忠実であるかを改めて理解しました。イエス様が示すメシア・キリストとは、そのような事柄を可能とする方です。それが可能となるのは、イエス様ご自身が、十字架の死という人間的視点から見れば、失敗・敗北としか思えない姿を通して、それが主なる神様のご意思であることを示されたからです。最初にメシア像の違いと述べましたが、長い間、預言者たちが示し続けた事柄も同じです。主なる神様は、人間が何度忠実さの実現に失敗しても、もう一度立ち返ることを待っておられるのです。異なるのは、主なる神様に立ち返ることを、その赦しの愛を、イスラエルの滅びや苦しみを通してではなく、イエス様がすべての苦しみを引き受けて、可能にしてくださったということです。

今、世界では、様々な失敗が行われています。ことに争いあうこと、争いの準備を整えることを通して、さらなる失敗に向かおうとしています。21世紀は、20世紀のSF的な諸メディアで示されたような、無人兵器による戦いの時代になるのかもしれませんが、また、従来法律を超える事柄、法律では判断できない事柄が行われる時代ともいえるかもしれません。しかし、主なる神様は、どのような状況であっても、正義と公正を望む方であり、どのような人間であっても、立ち返ることを許し、受け入れてくださる方です。イスラエルはかつて、その王国の滅びを通して、そのことを示しました。イエス様は、その十字架の死を通してそのことを示しました。わたしたちは、そのイエス様を信じる集いです。そうであるがゆえに、これからも一緒に礼拝や教会の様々な活動の中で、その主なる神様の愛を示したいと思えます。この世界にどのようなことがあっても、主なる神様の許しと慰めと導きがあることを信じ続け、またそのことを世界に示し続けたいと思えます。